

050205 M1 居住者インタビュー・倉島 和弥氏・美千子さん

インタビュアー:中村 政人 アシスタント:福田 啓作

中村 (以下、N) :まずは、M1 を購入された動機及び、当時の家族構成について伺いたいと思います。

倉島和弥氏 (以下、K) どこから話せばいいだろうか (笑)。当然、妻はまだおりません。私が 18 位からかな、もう少し前から動いていたのかも知れないけど、あんまり僕は興味が無かったんですね (笑)。ここの土地を親戚の紹介で両親が手に入れて、そうこうしているうちに父が手術をすることになって、、、。

今までは営業マンが親切だったから、ということしか僕は知らなかったんですが、昨日母に聞いた話しでは、なるべく短い時間で建つ、というのが M1 に決めた最大の理由だったようですね。

N:購入されたのは何年位ですか？

K:昭和 30 年生まれで、19 歳の時に引っ越してきましたから昭和 49 年位ですね。M1 が出て、マイナーチェンジしてすぐ位のものではないでしょうか。建築学科を受けようとは思っていたけど、まさか自分が住宅に関わるようになるとは思っていなかったし (笑)、当時、僕の中で住宅と建築というのは少しずれた所にあったから、あんまり興味も無く、しばらくはこういうものかな、という感じでしたね。

N:そうすると、お父さんとお母さんと・・・。

K:ええ、ほとんど 2 人で決めていました。いくつかの展示場を見てまわったけど、当時は積水ハウスとハイムとミサワとか、それ位のものがあつた位じゃなかったでしょうか。それで、父の病気のことがあつたから、できるだけ早くということと、値段もよそより少し安かつたんじゃないでしょうかね。調べてみたら、870 万円かな。今ではちょっと考えられない値段だけど、それが 1 番大きい理由のようです。

奥様 (以下、M) :あと、家族構成で言えば、弟がいたんだよね。

K:そう、家族構成でいえば、4 人。6 つ下の弟ですから、当時彼は中学にはいるかどうかというところですね。こっちの中学に転校だったから。子供達はもう家にはあんまり興味が無いまま、それまでは官舎、官舎できていました。

N:最初に住まれた時の印象等覚えていらっしゃいますか？

K:そりゃあもう、官舎とくらべたら (笑)。庭は狭いけれど、建物に関して言えば、まず、埃が入ってこない。官舎は北風が吹くとザラザラでしたから。木サッシの、いわゆる昔の木造でちょっと新建材が使つてあるような住宅っていうか、官舎でしたから。それ以前に那須に住んでいる時も同じですし、そういう意味じゃ、まず、明るいし、埃は入らないし、水洗トイレだし、なんといつてもお湯が出る (笑)。感動的ですよ。

M: (笑)。ベランダがいいよね。

K:うん、ベランダも広いし。あと、電気温水器だったんですよ。

ちょうどあれはオイルショックの後ですよ。だから深夜電力が安いってことで導入されたと思うんですが、お風呂を沸かすってことがないですよ。もちろん自分の部屋ももらったし、きれいだし。あんまり不便だとか、悪い印象は僕の中ではなかったですよ。まあ、建築をやるようになってから、良い所も悪い所もまた見えてくるんですけど。当時はものすごくモダンな感じだったし。友人が積水ハウスで新築して住んだ所に遊びに行ったけれども、こちらのほうがモダンな感じはしましたね。

N:住み始めて、デザイン的な部分ではどのようにお感じになりましたか？

K:あんまりなんとも思わなかったですね。ただ、友達とかが「変わってる」と言っていたような気はしますけれども。自分あんまり違和感なくて、こういうもんだと思っていたんですよ。家にどんな種類があるかもろくに知らない状態ですから、そういうもんだと思って。

N:お父さんお母さんがM1に決められたということですが、先ほど挙げられた理由以外に、なにかM1を選ばれた理由はあったんでしょうか。

K:母の口からはそれ位しか出てこなかった。今建て替えるとしたらもうちょっと勉強したから違うのにするかもしれない、とは言っていましたけれど。

N:工場生産の家、ということに関して当時何かお感じになりましたか？

K:どうやって作るものかというようなことは、僕自身後になってからしかわかっていないですね。後に住宅史をやったときに、「おお自分の家が出てるよ」、みたいな感じで(笑)。その辺から、ああそういうものなんだ、というふうに少し自分の家に興味移った部分はありますけどね。

N:それは学校でですか。

K:ええ。住宅史の中で写真が出ていました。プレファブリケーションっていう家の建て方の1つとして、クレーンで吊ってる写真がです。母は確かクレーンで吊ってるところを見に来て、「もう出来ちゃったのよ」、というような感じで言っていたような気はします。

N:教科書に出ているのを見て、どうお感じになりましたか？

K:建築を勉強していましたから、ちゃんとした家なんだというか、「すごい」、と思いましたね。それで、また **Docomomo** の 100 選に選ばれたでしょう？これは、確実に歴史に残りました、というような証があるじゃないですか。そういう意味では、プライドを持てるようにはなりましたよね。

N:こちらの家に住まわれてきた時間を振り返られると 30 年近くになると思うのですが、その時間の中での経緯や変遷はどのようなものだったのでしょうか？

K:うん、30 年ですね。まず、父は 1 年も住んでいないんですよ。ですから 1 年経った時点で 3 人家族になり、僕らが下宿することもなかったんで、ずっと 3 人で暮らしてきて、それで結婚して 4 年位外に出ていたのかな。それでまたここへ帰ってきて、その時は弟はもう外に出ていましたから、母が 1 人で住んだ期間が 2 年位あったんですね。

N:倉島さんが以前書かれた文章を拝見したんですが、頭痛やシックハウス等に悩まれた

ということでしたが。

K:それは、シックハウスというものが世間で騒がれる前に、仲間との勉強会で取り上げた時、ある先生のお話を聞いて、母が悩んでいたのはこれだったんだと、その時にちょっとわかったんですね。その前から、バスに乗るとよく酔っていたんですよ。それもよく考えると、以前はバスの床も木材でしたから、クレオソートのような防腐剤を塗っていますよね。そのせいなのではないかという気が、今になるとしますよね。それから、約 8~9 年前、築後約 20 年経ってから内装に和紙や檜、泥等を使って、1 階の部分だけやり直した時の感想が「匂わない」ということでしたから、以前の頭痛は確実にシックハウスだったわけよね。下地がケイ軽ベニヤを張ったもので、その上がビニールクロスでしたから、今で言うところ有害ガス出放題という感じですかね（笑）。床がポリエステルカーペットでしたし、その下地がパーティクルボードになっていましたから、もう接着剤を凄く使っていたんだと思いますけど。

N:建物の増・改築をされる前に傷んできた箇所等もあったかと思いますが、気になった点等はありませんでしたでしょうか？

K:家はあんまりメンテナンスをしていない方だと思うんです。7 年毎に外装のペンキを塗り替えただけで、現在はあちこち雨漏りがあります。1 階の玄関部、階段踊り場のサッシや 2 階の納戸等々です。現在見積もりをもらって、その質疑をやりとりしている最中なのですが、屋根の葺き替え、樋、シールのやり替え、一部外壁を取り替えですね。それと、今サッシをやりかえると全部カラーサッシになってしまって、シルバーのサッシが無いので、1 度外し、ばらして、パッキング入れ直して組み直し、もう 1 度入れ直してもらおうと思っているんですよ。

N:そうすると、ある程度オリジナルの状態を外観的にも保ちたいということでしょうか？

K:はい。それまでは外断熱で、違う外壁を上から張り、二重屋根にして庇をつけるということ自分でやろうと思っていたんですよ。でも、Docomomo に認定されちゃったから（笑）。これはきちんと残してあげなければいけないだろうと思ってしまいました。筑波に電話したら同じ部品はできないと言われたんですが、ハイムの岩原さんにご相談したら、増・改築用の部品があるはずだからできないはずはない、ということだったんですね。それで現在、坂戸のファミエスとやりとりをして、塗装と屋根の葺き替えとサッシを組替えて、シールで押さえられる所は押さえてということで。ただ、壁の断熱材は多分もう死んでいるんですよ（笑）。本当は 1 度壁を剥がして断熱材を入れ直すか、外断熱にしたいんですけど、形が変わってしまっただけはまずいだろうということで、もうひと踏ん張り、このまま住んでみようというのが現状です。

N:でも、それはメーカー側が聞いても嬉しいことでしょうね。

K:岩原さんは凄く喜んで下さいましたね。

N:僕自身も M1 が好きでこういう仕事を受けていますので。車等もそうですが、自分が愛着を持っている車というのは、そのブランドで愛好家が集まってきたり等といった境地に

来ていると思うんですね。そういった意味で、M1に愛着を持っている人たちは、若い人たちも含めて、確実にいらっしゃると思うんですね。でもそれは、工業化された商品であるからこそ、手工芸的な方法ではカバーできない量に一気に繋がってくるという良さもあると思うんです。ですから、大事にして頂ければと思います（笑）。僕自身も、大学に14ユニット買ったんですね。フレームだけなのですが、少し遊んでみようかなと思ひまして。

K:今、ハイムの岩原氏、東洋大学の浦江先生、京都の建築家・中村先生、家づくりの会の仲間とで、リユースフレームに内装と外装をどのように装着できるかという研究を、始めたところなんです。この間、建築家の元倉真琴さんが、リユースという形でRCの上にユニットを載せてやってらっしゃいましたよね。あれは本当に、クレーンで吊って持って来るスタイルだから、逆に言うと元に戻してあげて、そのまま使えるという本来あるべき姿で、それがずっと繋がっていけるような気がしています。ある時期から、プレファブではなくて住宅産業という恰好になってきてしまって、ハイムはハイムで営業上仕方なく、迎合してしまった訳ですよ。それで、M1のようなタイプは消えていってしまう訳だけでも、今になれば、本当はもっと残すべきだった訳ですよ。そうすると、もう少し早い時期からリユースということも考えられた可能性は高いし、もっと上手い発展の仕方もあったのかも知れないですよ。やっぱりニーズに答えすぎてしまった結果、少し時代とズレがでてしまった。でも、後に戻るには戻りやすいタイプだから、またこういうものが見直されるんじゃないかという気がしますけど。ハイムも相当学習したに違いないから、今度こういう風なものを出す時はもっと性能が上がっていると思うし。

N:倉島さんご自身が建築家として活動されている訳ですが、M1に住まわれてきたことを建築家の視点から見て、どのように感じてらっしゃいますでしょうか？

K:納まりなんかは、当時そこまで考えきれていない部分があって、枠なんか全部ユニットで着ければいいという発想だし、畳を入れたら平らになるし、ということで靴ずりが凄く高かったんですね。必ずドアの下に靴ずりが入って、それはとても邪魔だった訳ですよ。後は、巾木の納まり等も、細かいことを言うと結構しんどいものも一杯あったんだけど（笑）、でも、改装してみて中身を見た時に、これはまだまだ使えるんだということを実感したのね。だから、彼女(M)は新しい家に住みたいというのはあると思うんだけど（笑）、これは使えると僕は確信しました。当時の骨組みは、自社工場で作るというよりは既成の工業製品の鉄骨材を組み合わせて使っているから、今のものよりもずっと厚めのものを使っているんですね。そういう意味では、性能というのはある意味安心かもしれませんし、ギリギリの線で数値を出していないと思うんですね。それが見えたから、これはまだ使えると思って、改装することに自信を持てたというか。ですから、靴ずりも全部外して引き戸にして、つまり、骨までにはしていないけど、下地を全て利用したまま、家具なんかも外して、また嵌め込み直して、というように全部利用しましたけど。キッチンも全部取り替えて、ユニット連結部分の空洞が死んでいましたので、そこは逆に押し込んで利用しましたね。ですから、まだ使うスペースはあるんですね。ユニットバスに関しては、こ

れ専用のユニットだと思い込んでいたので、ハイムに頼んだんですね。昔は焼付塗装のカラー鋼板で、錆びがすごかったんですけど、上のパネルだけを取り替えてもらったんですが、それを外した際に、これは在来でやり直しができるし、もっと広いお風呂ができるということに気がつきまして、いずれまた、ということですかね（笑）。だから、骨さえちゃんとしていれば、これはいつまでも使えるんですね。錆びない限りは、恐らく鉄は劣化しないだろうと思うので、むしろ基礎のコンクリートの方が危ないかもしれないですけど。でも、地震がきて、ボルト切れて落ちて、斜めになるだけですよね。でも、中のものが壊れるだけで、ひしゃげてしまうことは無いから、また載せ直せばいいのではないかとタカをくくっています。

N:今まで住まわられていて、地震の時等はいかがだったでしょうか？

K:揺れますよ。多分よその家より揺れているんじゃないかと思うよ。2階にいと、地震が来るなということを知ることができますよ（笑）。とってもよく揺れます。道路の段差でトラックがドンッと揺れると、家もズンッと揺れますから。そういう意味では、必ずしも剛性はないかもしれませんが、だからといって困っていることもないし、別にいいのではないかと思いますけどね。

N:奥様はいかがでしょう？

M:トイレもお風呂もベランダも大きいんですよ。それは凄く気持ちいいかな、という位でしょうか（笑）。窓も大きいし。

N:彼女の家は仙台で宮城沖地震に遭い、昔ながらの在来構法だから、そういうのと比べれば近代的なハズなんですけど（笑）。

M:あ、そうそう。畳の部屋がないという話をすると珍しいと言われますね。当時、親が建てた家で畳の部屋が無いと、ちょっとは欲しいんじゃないかしら、と思いますね。

K:普通に考えて変だよな。

N:作ろうと思えば作れた訳ですよ？

K:そうですね。

M:家具なんかも洋風のもので揃えていたよね。

K:ちょっとハイカラな人だったんじゃないか、と僕は勝手に思っているんですけど（笑）。

N:自動車好きということと M1 をお好きでいらっしやることに、何か共通点はあるのでしょうか？

K:どうかなあ。あると言った方がいいのかな（笑）。それはね、父親の影響だね。何でも作る人だった。おもちゃも全部作ってもらったしね。それから、父親の弟は旋盤を自分で作って、部品を自分で作れる人なんです。彼の部屋には旋盤が置いてあるんですよ（笑）。それ以外にも、ガラスを磨いてニコンのレンズに負けないレンズを作れるような人なんですよ（笑）。そういう一家なので、何でも物は作ってもらった。車も官舎の中では随分早い時期から持っていましたし、何台も替えていましたね。中古を買っては自分でいじってね。そんなのもあったからなあ。それで、たまたまルノー・サンクを買ってしまったがために、

乗り潰し、ミニを手に入れ、ということでそういう車にこだわっているというのが現状ですね。でも、結果としては、M1とは繋がるのかもね。部品交換しながら、メンテナンスしながら使い続けられる工業製品という意味ではね。

N:最初のコンセプトでは、家族構成の変化に応じて、箱の増減によってフレキシブルに対応できる、という考え方があったと思うのですが、途中の段階でそういった増・改築というのは行われたのでしょうか？

K:貧乏なだけ（笑）。

M:家族が一杯増えたという訳でもないしね。

K:結婚した時に、裏の小さな畑のような庭を潰せば1ユニットを建て増しすることも可能だったんですが、とりあえず間に合ってしまったということですね。

M:まあ、部屋の数なんかは足りているんだよね。

K:でも、居間のような場所は、別々の時間に自由に使いたいというのがあって、冷蔵庫は今2台あって、本当はキッチンも2つ欲しいんだと思いますけどね。

M:やっぱり、リビングとダイニングが一緒になっているというのは、非常に難しいですね。

N:Docomomoの100選に選定されたということに対して、施主の立場としてどのように感じられますでしょうか？

K:嬉しい。ちょっと自慢だと思うんですよ。小学校の教科書とかにも是非紹介して欲しいよね。日本の生活文化の変化みたいな所で。そういうことって小学校でも中学校でもほとんど教えていないと思うんですが、本当はそういうことも教えてほしいと思うし、そういう中で住宅がどうあるべきかということを普通の人が考えるようになれば、M1のように工場から持ってきて出来上がるような家もあれば、こつこつ大工さんが作る家もあっていいし、じゃあ、自分たちはどっちを選んでいくんだろう、あるいはそこでどういう暮らしをするんだろうということを、みんながもっと知って、考えて欲しいし。そういう意味では、M1はある意味マニアックなパターンですよ。それはもっと人に知ってもらえたらいいと思う。もっと一般の人に広報したらいいのに。そんなに凄い、歴史に残るような建物だったということがわかったら、日本人はそういうのに弱いですから（笑）。良いコマーシャルになると思うんだけどね。

M:でも玄関ドアがいいよね。←←←とうとつですねえ、、、

K:こんなちゃっちゃいドアのくせに、結構モダンを象徴していますよね。僕の仕事は、在来工法で住宅を作るのがほとんど主になって、大きい建物も在来でやりたいと思っていたりするんだけど、ハウスメーカーがどんどん伸びてきて、何も考えず、ハウスメーカーの性能だけで、みんな買っていってしまいますよね。民家がハウスメーカーのものになっちゃっていると思うんです。川崎の民家園に、いずれ展示場のようにセキスイやミサワの住宅が建つようになると、時々冗談で言っていたんですが、M1は建ってもいいということですよ（笑）。江戸東京建物園にもいずれ建つということですよ（笑）。せっかくだからそう

いうものになって欲しいよね。未来の民家なんだろうと思うんですよ。

M: そうですね。ドアも直そうという話になったんだよね。だけど、気に入ったドアが無かったんだっけ？

K: そうそう。アルミサッシのトステムとかのドアになっちゃうんだよね。

## どあのはなしはいらないかも、、、

N: 今後、M1 にどのように住まわれていくかということに関して、プランやご予定等がありますでしょうか？

K: とりあえずは、雨漏りを直す（笑）。そして原型の状態でしばらく大丈夫なようにする、ということが1つ大きな目標かな。あと、2階をもう少し綺麗にしたり、物の整理をもうちょっとできるようにしなければいけないですね。ただ、親の世代よりもこちらの方がたくさん毒を食べている世代ですから、夢は叶わないかもしれないですが（笑）。まあ、壁をぶち抜いたりすることはできると思うしね。順番から言えば、いずれ夫婦と猫だけになるでしょうから。

M: その時の家族構成のまま、今来ている訳だからね。

K: 多分、骨組はまだ大丈夫な訳ですから、それを使いながらということになるんじゃないかな。だから、規模を大きくする必要性はないですよ。仕事がそこそこあって、食べる分位は稼げて、外に借りなくてもいいということになれば、ここに仕事をするスペースを作る必要が出てくるかもしれないですけど、まあ、今のところはそういう発想もないし。そういう意味では、大きさはきつとこのままですし、外から見ても色が時々変わっている位で、あとは傷んだ所を直していくと。そうなってくると、ハイムがいつまで部品をストックしてくれるかですね。ただ、屋根の折版は他のメーカーが出しているものとサイズも合うはずですし、最後は包むことを考えればどうにでもなるので、その時までにはきつとこんな感じですね。ただ断熱性能をもうちょっと上げられないかなと思いますね。家族が少ないからいいんですが、省エネルギーという点では無駄遣いをしている気がしますね。

N: 最後に一言ずつ、ご自身にとってM1とは？

K・M: （笑）。

K: 僕にとっては、住まいはずっと官舎でしたからね、そういう意味では定住した最初の場所ですから、住んでいる場所としてもここが決まった場所ですし、最初の建物のままですから、故郷的なものもあるだろうし、Docomomo に選定を受けたということであれば、どこかにプライドはありますよね。

M: 私の中ではこれからかなあ。

K: でも、10数年は住んでしまってますから、結果としては帰ってくる場所にはなっていると思うので。

M: そうだね。

K: ちょっと自分でペンキ塗ってみたら (笑)。

M: 多分、これからもっと愛着が持てるのかなって。

K: どうですかね。三日坊主ですからね (笑)。